

12. 和束町湯谷ノ原古墳の調査

京都府立大学文学部考古学研究室

1. はじめに

京都府立大学では2017年より和束町と包括連携協定を結び、和束町史編さん事業への協力をおこなっている。本稿ではその一環で調査した湯谷ノ原古墳に対する墳丘測量の調査成果を報告する。湯谷ノ原古墳は和束町大字撰原字湯谷原に所在し、北方400mほどにある撰原峠を越えてすぐのところ、昨年度報告した坂尻古墳群がある。和束町内でこれまでに確認されている古墳の中では最も南に位置し、奈良（木津川）方面から和束谷へ至る入口に築かれた立地上、重要な古墳であるが、これまで調査がおこなわれたことがなく、築造時期はもちろん、墳丘の形態・規模や埋葬施設の有無についても何ら手がかりがなかった。測量調査は、2021年10月25日～11月11日にかけて断続的に実施した。調査参加者は以下の通りである。

菱田哲郎・諫早直人（以上、教員）、池田野々花・小林楓・溝口泰久（以上、博士前期課程）、梅野留美子・福田麻衣・藤川聖起・増田慧子・青柳隆慈・永久陽菜・川西優帆・高橋日向・前田愛佳・松岡茉陽琉（以上、学部生）

なお、調査にあたって山本千代美氏をはじめとする和束町史編さん室の皆様には大変お世話になった。また調査期間中、長福寺住職の大野妙瑞氏や、元京都府埋蔵文化財調査研究センターの橋本清一氏からご助言を得た。ここに記して感謝の意を表したい。（諫早直人）

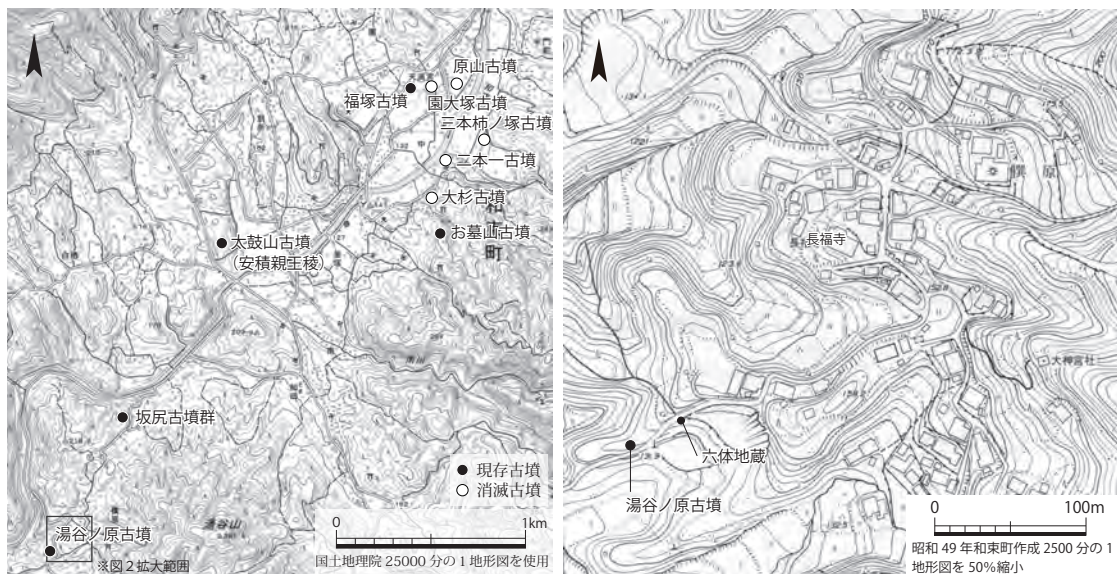


図1 湯谷ノ原古墳と周辺遺跡の関係 (S=1/4000)

図2 湯谷ノ原古墳の位置 (S=1/5000)

(京都府立大学考古学研究室 2022 に加筆)

2. 周辺環境と湯谷ノ原古墳に関する既往の認識

(1) 立地と環境

和束町は京都府東南部に位置し、相楽郡に属する。和束断層谷を南西に流れる和束川の流域に広がる和束盆地と、それを取り囲む山々で構成されている。

和束町内からは弥生時代以前の遺跡はまだ見つかっていないが、出土地不明の石器が存在しており（川崎 2022）、将来的には遺跡の発見が期待される。古墳時代になると数はそれほど多くないものの古墳が築かれており、現在消滅してしまった古墳を含めて 11 基の古墳の存在が知られている。それらの多くは東和束に集中し、西和束には和束川左岸の丘陵上に坂尻古墳群と湯谷ノ原古墳が現存するのみである。坂尻古墳群は 2 基から構成され、横穴式石室がよく残る。1 号墳は直径約 13 m の円墳に復元でき、横穴式石室は現存長約 3.7 m、幅約 1.5 m、高約 1.2 m の規模をもつ。2 号墳は直径約 10 m の円墳に復元でき、横穴式石室は残存長約 3.6 m、幅約 1.2 m、高約 1.1 m の規模をもつ。これらは石室構造から、おおむね 6 世紀中葉に 2 号墳、1 号墳の順に築造されたと考えられる（京都府立大学文学部考古学研究室 2021・2022）。1 号墳の南側に近世の信楽道とされる旧道が通っており、これを南に進み撰原峠を越えると道沿いに六体地藏が並び（写真 2）、そのすぐ近くに湯谷ノ原古墳がある。湯谷ノ原古墳は湯谷山の西側にのびる丘陵上に位置し、周辺には茶畑が広がる。

坂尻古墳群と湯谷ノ原古墳を結ぶルート上の撰原峠には文永 4 年（1267）銘石造地藏菩薩立像があり、坂尻古墳群のすぐ北の谷には和束川の対岸に正安 2 年（1300）銘弥勒摩崖仏がある。これらから少なくとも中世にはこのルートが大きな意味をもつことがわかり、古墳時代の和束谷の導入路を考える上で重要である。（藤川聖起）

(2) 既往の報告

湯谷ノ原古墳が文献に現れるのは、1972 年の『京都府遺跡地図』が初出である（表 1）。古墳は丘陵頂にあり直径 16 m、高 2～4 m となっている（京都府教育委員会 1972）。なお、1985 年にも同様の記述がみえる（京都府教育委員会 1985）。1995 年の『和束町史』では、「西側が削りとられて約 5m の崖をなして」との記述があるが、写真からは現在と同じく南東斜面が削られていることが確認でき、古墳南東側を削平して道路が拡幅されたことがわかる。また、当古墳は「古くから古墳と呼ばれ石棺が出土したと伝わる」が（乾 1995）、今回の調査に伴い大野妙瑞氏（長福寺住職）に聞き取りをおこなったところ、周辺が撰原集落の境界として認識されていたことはうかがえたが、湯谷ノ原古墳が古くから認知されていた事実はうかがえなかった（聞き取り日：2021 年 10 月 27 日）。これまで本格的な調査がおこなわれたことはなく、古墳の時期や埋葬施設、遺物などは不明である。

表 1 先行研究における湯谷ノ原古墳の記述一覧

刊行年	書籍名	編著者	記述の有無	備考
1965	全国遺跡地図	文化財保護委員会	×	—
1972	京都府遺跡地図	京都府教育庁指導部文化財保護課	○	丘陵頂、径16m、高2～4m、古墳？
1985	京都府遺跡地図〔第2版〕	京都府教育委員会	○	上に同じ
1995	和束町史	乾幸次	○	西側が削りとられて約5mの崖をなす

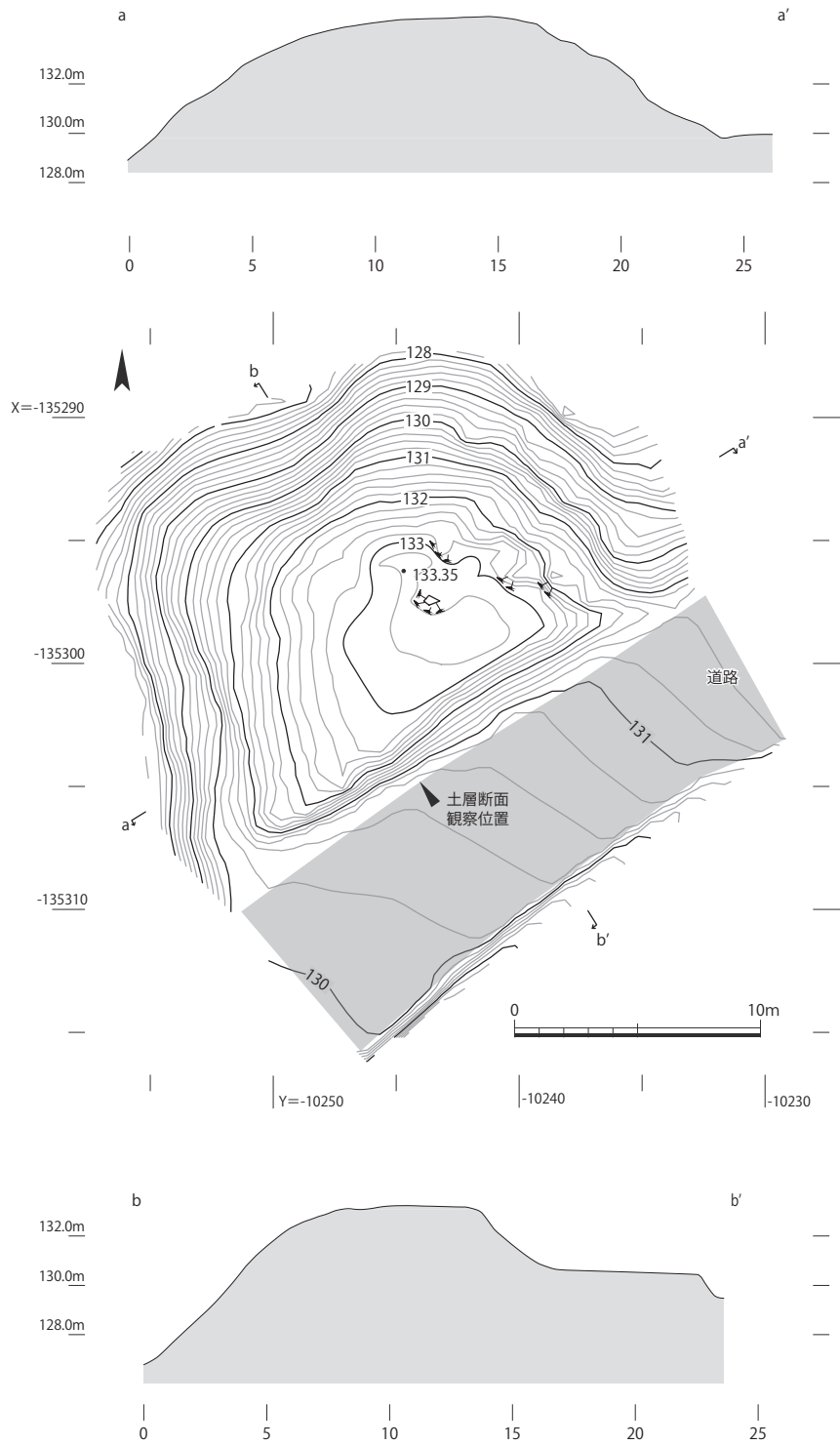


図3 墳丘測量図 (S=1/300)

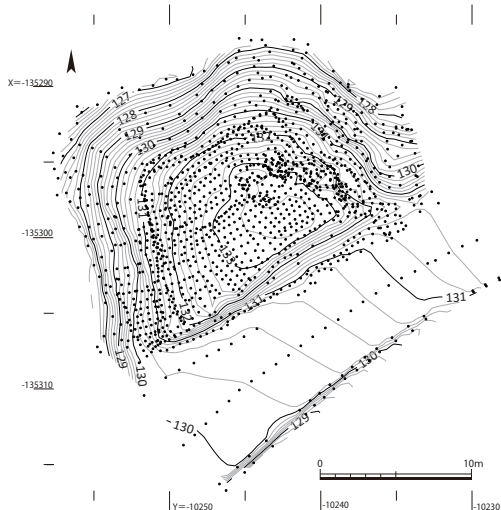


図4 計測点 (S=1/500)

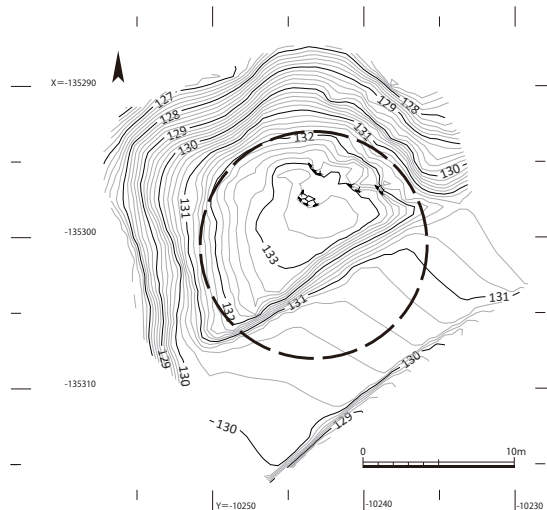


図5 墳丘復元図 (S=1/500)

3. 調査成果

(1) 測量調査と等高線図の作成

2021年10月25日に基準点測量を、10月から11月にかけてのべ3日間の日程で測量調査をおこなった。測量範囲は古墳の周辺約30m四方である。墳頂部の標高は133.35m、墳裾は不確定ながら南東側道路では130.5mである。斜面が急峻で危険なため、今回は標高128.0mが下限となるように計測した。

測量にはトータルステーションLeica Giosystems社TRC405、TRC405powerを用いた。測点の間隔については、おおむね1mごとで、墳丘平坦面に関しては0.5mごとに測点を落とすように留意した。また傾斜変化点では測点を増やすなど、微細な地形の変化をとらえられるよう意識的に測量した。以上のもと計測をおこない1447点を計測した。現地で測量した座標データはGioLook社Gioline (Ver.4.70)を用いてCSVファイルに変換した。等高線はCSVファイルの座標データをGolden Software社Surfer13にインポートして作成した。

(2) 墳丘復元

測量成果から湯谷ノ原古墳の墳丘復元を試みる。墳丘上には10×5m程度の平坦面が広がっている。落ち込みがいくつか認められるが、これは盗掘孔など人為的なものではなく、倒木など自然環境的な要因が考えられる。古墳の平面形は南東側の道路による削平部分や北東斜面では地形がやや崩れている一方で、北～南西方向の斜面は比較的原形を留めていると考えられる。特に西側斜面標高132mラインでは等高線が緩やかな弧を描いており、古墳であるとするれば直径約15mの円墳に復元することが可能である。高さは南東方向で道路による削平のラインを基準として3.0m以上である。(小林楓)

(3) 墳丘断面

南東側で断面が露出していたため、観察をもとに模式図を作成した。層は3層に分かれており、上から第1層(表土)、第2層、第3層とした。

墳丘を主に構成している第2・3層について、古墳周辺の地質と同じ花崗岩質であったため、人工の盛土である可能性は低いと思われる。また、墳裾においてこれら3層のどれにも属さ



写真1 土層断面

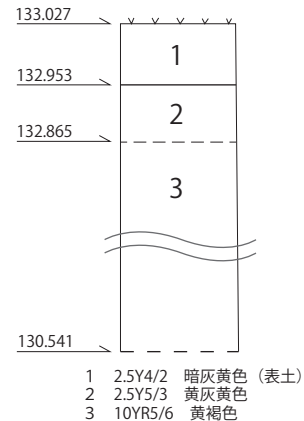


図6 土層断面模式図

- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色 (表土)
- 2 2.5Y5/3 黄灰黄色
- 3 10YR5/6 黄褐色

ない土の層を確認したが、これはかつて表土であった土が水害などで崩れ落ちてできた層である¹⁾。(増田慧子)

4. おわりに

和束町史編さん事業の一環として、福塚古墳、坂尻古墳につづいて湯谷ノ原古墳の測量調査をおこなった。その結果は、円墳と見ることも可能であるが、明瞭な墳丘裾を確認することができず、古墳としては疑問が残ることとなった。また、2022年度におこなった地中探査の結果からも、埋葬施設の存在を積極的に評価できる結果は得られていない(来年度報告予定)。上述したように、この古墳については、1972年刊行の『京都府遺跡地図』に「丘陵頂 径16m、高2～4m、古墳？」と記述され、疑問をもちつつも古墳として紹介されたのが最初の紹介である。このときに参考文献として、『京都府相楽郡誌』が挙げられているが、ここでは「撰原古墓 西和束村大字撰原」につづけて「撰原墓附近にあり石棺出つ 発掘詳ならず」と記載されている(京都府教育会相楽郡部会1920)。遺跡地図に記される湯谷ノ原古墳の場所は、撰原墓地から東に100mほどの場所にあるが、郡誌所載の「撰原墓」に擬したのであろう。なお、『和束町史』においては、これらの記載を総合する形で、「撰原区の墓地の近くにあり、古くから古墳と呼ばれ、石棺が出土したと伝えられているがその詳細は明らかでない」と記述している。今回の結果からは、遺跡地図に示される湯谷ノ原古墳の位置そのものが「撰原墓」とは異なっていると考えられ、石棺出土の情報を湯谷ノ原古墳に引きつけることは正しくはないということになる。したがって、改めて撰原墓地の周辺において、「撰原墓」とその石棺について探索する必要があると感じられる。(菱田哲郎)

註

1) 橋本清一氏のご教示による。

参考文献

乾幸次 1995 『和束町史』第1巻 和束町

川崎雄一郎 2022 「和束町保管の石器について」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第8号

京都府立大学文学部歴史学科

京都府教育委員会 1985 『京都府遺跡地図 第5分冊〔第2版〕』

京都府教育会相楽郡部会 1920 『京都府相楽郡誌』 同部会

京都府教育庁指導部文化財保護課編 1972 『京都府遺跡地図』 松香堂

京都府立大学文学部考古学研究室 2021 「和束町坂尻古墳群の調査（1）」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第7号 京都府立大学文学部歴史学科

京都府立大学文学部考古学研究室 2022 「和束町坂尻古墳群の調査（2）」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第8号 京都府立大学文学部歴史学科

菱田哲郎 2015 「和束川流域の古墳」『京都府立大学文化遺産叢書 第9集 和束地域の歴史と文化遺産』京都府立大学文学部歴史学科

文化財保護委員会 1965 『全国遺跡地図：史跡・名勝・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所在地地図，京都府』



写真2 墳丘遠景（南東から）



写真3 古墳近隣の六体地蔵



写真4 墳丘（南から）



写真5 墳丘（東から）



写真6 調査風景（1）



写真7 調査風景（2）

編集後記

フィールド集報は、刊行当初より Adobe 社の InDesign を利用して組版作業を手作りでおこなっている。InDesign の取り扱いは、歴史学科文化遺産学コースのうち、考古・建築・地理の実習メニューに含まれ、本書の一部については、そうした実習のなかで学生が組んだものとなっている。

今年度のフィールド調査においても、各地で多くの方からのご理解とご協力を賜った。ここに改めてお礼申し上げる。歴史や文化遺産にかかる調査は一人では決して成しえないということを、今後も常に意識するように努めたい。(う)

京都府立大学文学部歴史学科

フィールド調査集報 第9号

編集・発行 京都府立大学文学部歴史学科

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5

発行日 2023年3月30日

印刷 株式会社 北斗プリント社

〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2
